

ウチナンチュ・ボランティアのアイデンティティと民族文化主義 ～ハワイの「オキナワン・フェスティバル」における半構造化インタビュー～ 白水 繁彦*

【I】

A Study of the Ethnic Identity and the Ethnoculturalism of the Hawaii's Uchinanchu: A Semi-structured Interview with Volunteers of the Okinawan Festival. <I>

〈まえがき〉

本稿は、次号No.24所収予定の「ウチナンチュ・ボランティアのアイデンティティと民族文化主義～ハワイの「オキナワン・フェスティバル」における半構造化インタビュー～<II>」を後篇とする論攷の前篇である。前篇と後篇の章立ては以下のとおりである。

1. 問題の所在
2. 調査の概要
3. 半構造化インタビューの調査報告
〈No.1〉～〈No.13〉
以上前篇（本号）、以下後篇（次号）
〈No.14〉～〈No.27〉
4. 量的把握
[1] インタビュー相手（28名）の社会的属性
[2] 質問項目への回答
5. まとめ
6. 付録
[1] 半構造化質問紙
[2] 特別編 来賓（沖縄県の町長）へのインタビュー

1. 問題の所在

筆者は先に『海外ウチナンチュ活動家の誕生：民族文化主義の実践』（御茶の水書房、2018）のなかで、ハワイやロサンジェルスの中継系のエスニック・エージェントやエスニック・リーダーと目される人びと、つまり活動家へのインタビュー結果を紹介した（以後、同書を『活動家の誕生』と略称する）⁽¹⁾。

筆者が『活動家の誕生』において明らかにしたのは、第1に、ウチナンチュの活動家たちの多

* 駒澤大学名誉教授、駒澤大学GMSラボラトリ研究員
Shigehiko Shiramizu, Ph.D., Professor Emeritus, Researcher of GMS Laboratory, Komazawa University

くが民族文化主義の信奉者であり、その普及者であるということであった。民族文化主義すなわちエスノカルチュラルリズムethnoculturalismとは、エスニック・グループの人やその子孫はエスニック・アイデンティティ（民族的自覚、同胞意識）を確立し、エスニック文化（民族文化）の継承、発展に寄与すべきであるという考え方や主張のことである（白水, 2018, 4）。

『活動家の誕生』で明らかにした第2は、活動家たちのエスニック・アイデンティティである。ここで改めてかれらの言説をパターン化してみると、大きく三つに分類できそうである。一つは、自分たちは「先祖が沖縄から来た日系人Japaneseである」という立場である。Okinawan IdentityよりJapanese Identityを重要視するという意味で「日系人アイデンティティ型」（日系型）とでもいうべきタイプである。活動家の多くがこの立場を表明した。それに対し、少数ではあるが、自分たちは「日系人ではない。オキナワンである」という活動家もいた。「オキナワン・アイデンティティ型」（非日系型）といってよいだろう。三つ目は「日系人でもあり、オキナワンでもある」という、いくつかのアイデンティティが共在するタイプである。これには「アメリカンであり、日系人であり、オキナワンでもある」というひとつも加えて「多アイデンティティ共在型」（共在型）と呼んでおこう。ホンネでは、この「多アイデンティティ共在型」に属する活動家が最も多いかもしれない（なお、市中でウチナーンチュの大量調査を実施したら、「わからない」「考えたことがない」などの「不明型」の人びともかなりの数にのぼると思われる）。

では、いわば一般のウチナーンチュ（この場合ハワイ在住のおきなわ・の・ひと）、なかでもオキナワン・フェスティバル（主催はHUOA：ハワイ沖縄連合会）の際に駆けつけてボランティアに勤しむような人たちは自らのアイデンティティについてどのような考えをもっているだろうか。

2. 調査の概要

筆者は長年にわたってハワイの沖縄系の人びとのアイデンティティと沖縄文化について調査研究を続けてきたが、2012年にも半構造化インタビュー調査を実施した⁽²⁾。

実際の面接調査を行ったのは筆者の当時のゼミ生で、学部2年生を主体とし、若干の3年生とオーストラリアからの留学生1名を含む、合計15名であった。かれらは夏休みを利用した事前合宿において面接調査の調査員としての訓練を受けた⁽³⁾。そしてオキナワン・フェスティバルの現地ではかれらはボランティアとして手伝いをするいっぽう、休憩の時間を利用して、周りのボランティアのかたたちにインタビューを実施した。

調査は、2、3人で一つの班を構成、全部で7班がインタビューにあたった。調査期間は2012年9月1日と2日。調査場所は第30回オキナワン・フェスティバルのメイン会場（オアフ島ホノルル市のカピオラニ公園）と、祭において販売される料理やデザートなどフードの下ごしらえが行われるトマス・ジェファーソン小学校の給食キッチンである（同施設はカピオラニ公園に隣接する）。ゼミ生全員がアンダーギー（沖縄ドーナツ）の生地作りと、その調理（揚げ）を手伝ったので、インタビュー相手（調査対象者）の多くがその現場にいた人、もしくはその人に紹介された人で、ほとんどがボランティア仲間である。つまり、人を介して対象者を増やしていくスノーボールメソッドを用いた学生が多い。むろん、必要に応じて自ら声をかけて調査依頼を敢行した班もある。

学生たちは約40人にインタビューしたが、雑音の多い場所で、しかもハワイ特有のアクセントを

もつ英語のために聞き取れなかったというケースも少なくない。なんとか使える回答は29票であったが、そのなかに著名なリーダーが二人（ハワイ大学教授で同大沖縄研究センター所長と元ハワイ沖縄連合会会長でハワイ沖縄家系図研究会会長）が含まれていたため、この二人のインタビュー記録は先に出版された拙著（前掲）に収録した。したがって、ここに掲載する27票、28人（次号【II】No.14の夫婦は二人で回答した）はリーダー層ではない、いわば一般のオキナワンと考えてよい。ただし、比較的重労働のボランティア活動に参加するほどだから、ハワイに4万人以上いるといわれるオキナワンのなかではかなりウチナーンチュ意識の高い人びとであろうということは想像に難くない。その意味では、意識調査のサンプルとしてはかなり偏りがあることに留意すべきである。

学生の意見を容れながら作成した質問紙は、生きた英語の練習を兼ねて、質問文と自由回答からなるいわゆる半構造的質問紙である（実際の質問紙は次号参照）。

3. 半構造化インタビューの調査報告

以下、調査の結果を掲げるが、インタビュー相手との挨拶や導入の会話等は割愛し、核心部分のみを抜粋する。なお、調査現場のリアリティを考慮しつつ読みやすさを考慮した「対話・編集方式」で記述する⁽⁴⁾。

インタビュー相手の名前はすべて仮名である（相手全員から調査結果の公表の了解が取れたわけではないので、できるだけご本人に迷惑がかからないようにするために仮名にした）。

なお、紙幅の都合で、報告を2分割し、今号を【I】とし、後半を【II】として次号に掲載する。

<No.1> パール

生年 1953年 女性 夫はナイチ

世代 三世（父方母方とも祖父母は沖縄県小禄出身）

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小禄字人会）

職業 歯科助手

住所 ホノルル

インタビューアー 鎌田季咲（当時駒澤大学2年生）サマンサ・ロ・モナコ（同留學生）

2012年9月2日 トマス・ジェファーソン小学校キッチン（アンダーギーの生地作り）

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

鎌田、サマンサ（KS）このお祭りに参加するのは何回目ですか？

パール（P）うーん、正確には覚えてないけど、10年、10年以上ね。

KS いつが初めてですか？

P よく覚えてないわ。多分、10年前。えっと、今年は2012… そうね、だったら2000年くらいだわ。

KS 何を楽しみにこのお祭りに来ていますか？

P 私が楽しみにするのは、世界のいろいろなところから来た人たちと会うこと、そしてオキナワンカルチャーに浸って楽しむことね。

KS お祭りでお気に入りがありますか？

P アンダーギーを作ることよ！

KS ところで、ウチナーンチュの精神ってなんだと思いますか？

P ウチナーンチュの精神？ウチナーンチュの精神… わたしが説明するとしたら？わたしなら… アメリカではみんな“all for one”というでしょ。そんな感じ。みんな一つの目的のために一緒になってはたらくことだと思うわ。

KS ウチナーンチュの文化で最も重要なことはなんだと思いますか？

P わたしにとって最も重要なことは… 多分それぞれの沖縄の故郷の人たちと集うピクニック。わたしたちは毎年やるのよ。オキナワンピクニックを。

KS それはオロクの人たちとやるんですか？

P そう、オロクよ。オロク（小禄字人会の）ピクニック。

KS 話は変わりますが、オキナワンはジャパニーズとは別のエスニック集団だというべきでしょうか？

P うーん、これをわたしに聞くのは興味深いことね。だってわたしは純粋なオキナワンだし、また、若いころまで私は本当にジャパニーズであると思っていたわ。そしてもう少し年を取ってから私は自分の祖先がどこから来たかを知ったわ。そして去年沖縄を訪ねて、そこですごく深く自分の境遇を感じたわ。

KS 去年行ったのが初めてだったんですか？

P そう去年沖縄に行ったのが初めてよ。第5回の「世界のウチナーンチュ大会」に参加したのね。それが初めてよ。

KS あなたの考えではハワイのオキナワンで目立った問題などがありますか？

P うーん、いい質問ね。年配の方々、私の祖父母のような古い世代はオキナワンとジャパニーズの間でいろいろな体験をしたけど、かれらはそうしたことを私たち次の世代にも知ってほしいと思っているかどうかかわからないわ。私たちはほんとうに何も知らないよね。

KS じゃあ、人々がその文化に興味を持たなくなることは心配ではないですか？

P かならずしもそうではないわ。わたしはオキナワンのコミュニティは十分強く、若者たちにそれを伝えていけるから。私が見たものから考えるに、オキナワンの文化は日本の文化よりも強く固まった、独特のものだと思うわ。沖縄は日本の中で離れた島であるがゆえに、日本の北や南、いろいろな地方とも違う。うん、日本の中でもすごく違うわ。実際日本に行ってそれを感じたわ。というのは私の娘がJETプログラムで英語を教えていたので彼女を訪ねて日本の北の地方、名前は思い出せないけど、行ったのね。そこで、東京とも違う、米作農家の人たちにも会った。また、京都にも行ったわ。そこも沖縄とは違っていたわ。

沖縄に行ったとき、小さな島国だからか、みんな同じようにとても優しくかった。日本本土に比べると明確な違いがたくさんあった。それを日本に行った時に見たわ。

KS まだお時間があるのなら少し質問をしたいのですがよろしいですか？

P ええ、もちろんよ。

KS 若いころにウチナーンチュとナイチとの関係で気が付いたことはありましたか？

P そう若いころね、私は両者の違いを薄々感じていたような気がする。多分小学生のころね。ただ、私の祖父母はその違いや軋轢を話してくれなかった。

両者の関係の難しさに気が付いたのは実際に私が昨年、沖縄に行ったとき。初めてそれがどれくらい難しいかを本当にわかったの。沖縄戦に関して少し学んだし、実際に平和祈念館にも行ったけど、詳しく知るの難しい。

とにかく、わたしの祖父母の基本は“がんばって”であり、彼らはわたしたちに偏見や違いを感じてほしくなかったと思う。また沖縄の人々が犠牲になったことも話してくれなかった。だからわたしは沖縄に行ったときに沖縄戦のことを学んだの。彼らは一度もこのことを話さなかった。若い時沖縄から来ているいろいろな偏見のなかにいたことを話してくれなかった。父方の祖父母はクリスチャンだったから、私たちに人を色眼鏡で見ないようにと気遣ったのではないかしら。

KS 自分をどう表すのですか？

P 私はだれかに「オキナワンなんだね」といわれたら「そう、オキナワンよ」という。だけど見てのとおり、私は日本人。だから私自身は日本人と思っているわ。日本人かと問われれば、相手によっては、「ちがうわ。わたしはオキナワンよ」といっていた。大学の時なんかそういうこともあったわ。でも日本人とオキナワンは同じものよ。わたしは心のなかでは違いはないと思っているわ。

KS じゃああなたはアメリカンやハワイアンというよりジャパニーズと感じるのですか？

P いえ、アメリカンよ。わたしはアメリカンというわ。だって私はここで生まれ育った。アメリカンだけど少し日本のカルチャーを知っているのよ。ただ、私の娘を訪ねて日本に行ってわかったことは、気持ちの上ではジャパニーズだけど実際はアメリカ人であるということ。日米では大きな違いがあった。特に文化の面において。

KS 家庭環境の質問ですが、どういう場所で育ちましたか？民族的にほとんどがジャパニーズ？それとも、または巨大なミックス？

P ほとんどがジャパニーズだった。ミドルクラスのね。管理職が多かったわ。そして行った高校が公立のマッキンリー・ハイスクール。日本人生徒が昔から多いので「トーキョーハイ」とか「トーキョーハイスクール」と呼ばれていた。

KS あなたは若いころジャパニーズとして誇りを持っていましたか？またはオキナワンとして？

P ジャパニーズとして誇りを持っていたわ。

KS このお祭りでオキナワンカルチャーのことを知ったのですか？

P ちがうわ。すでに知ってたわ。オロク・アザジクラブのピクニックに若いころから毎年行ってたから。そこに私のオキナワンカルチャーの深いルーツがあるのよね。

KS だからあなたは、オロク・アザジクラブの人たちとこのようにこのフェスバルにかかわったのですね

P そのとおりよ

KS 長時間ありがとうございました。

<白水 補記> パールは日本人（ナイチ）の多い町で育ち、戦前の公立としては日系二世の有名

人を輩出した高校へ行った。だから、日本文化の色濃い環境に育ったといえる。一方、オキナワンが固まって住んでいたプランテーションや、下町のカリヒなどオキナワンがマジョリティを占める町で育った人もいる。どちらにも、自分はジャパニーズだと自己規定するオキナワンは少なくないが、パールの場合はそれがより強固だったようである。しかし、学習が進むうちに自分の出自のこのことを知るようになり、強くオキナワンであることを意識するようになる。

それを決定づけたのは2011年の沖縄訪問である。これが単なる旅行ではなく、世界のウチナーンチュ大会（外国からの参加者はTaikaiと呼ぶ人が多い）という、沖縄性（一種のエスニシティ）を前面に押し出した巨大イベントに参加したということが大きいだろう。世界中から参集した数千のウチナーンチュが、那覇の目抜き通りを遮断しての大パレードで練り歩き、それから約1週間、様々な催しに参加する。その間、出自の市町村の歓迎レセプションにも招待される。最後は大規模コンベンションセンターやプロ野球も開催される球場で一堂に会し、大音響のなか様々なセロモニーや沖縄出身のメジャーな芸能人の演目を共に堪能する。そして最後はお決まりの全員総出のカチャーシーである。これで心が震えないウチナーンチュはいるのだろうかと思うほどである。筆者は95年の第2回大会から2016年の第6回まで参与観察を続けてきたが、会う人会う人すべてが「ウチナーンチュでよかった」と口にするのである。

この「Taikai」の洗礼を受けたパールは自己規定が大きくオキナワンに傾く。しかしそれでも「改宗」するまでには至らなかった。もちろんオキナワンであることに強い誇りをもつようになり、沖縄と日本（ナイチ）の違いもよくわかるようになった。しかし、だからといってオキナワンで押し通すことはない。相手に応じて「オキナワン」と「ジャパニーズ」を使い分けている。そしてこの二つのアイデンティティは彼女のなかで齟齬をきたすことはない。なぜなら、日本文化と沖縄文化は確かに違うが、だからといって、それでエスニシティを分けるほどでもないと思っているからだ。それを彼女は、両者は「同じ」という言葉で表している。こうした、大同小異という考えかたが生まれる背景は様々であろうが、アイデンティティの上位概念として、なんといっても自分はアメリカンである、という確固たる信念があるということも大きいだろう。彼女のアイデンティティは「多アイデンティティ共在型」に属するといってもよいかもしれない。

<No.2> グレンダ

生年 1952年 女性

世代 三世

HUOAメンバークラブ Ginowan Shijin Kai（宜野湾市人会）

職業 公務員（社会福祉士）

住所 ホノルル

インタビュアー 中西亜弥子（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日 於：トマス・ジェファーソン小学校キッチン（アンダーギーの生地作り）会場の休憩室

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

中西（N） オキナワン・フェスティバルに参加した初めての機会について教えてください。

グレンダ（G） 初めてオキナワンの活動に参加したのは5年前だから2007年だと思うわ。このアンダーギー作りのボランティアね。今日みたいにmixing（生地作り）とcooking（アンダーギー揚げ）をしたわ。

N ところで、ウチナーンチュ・スピリットとはどんなものだと思いますか？

G 勤勉と文化への誇り。オキナワンはみんなよく働くの。今日もみんなお互いに交代しながらみんなで働いているでしょう？これはみんなボランティアなのよ。あとは文化に対しての誇りが特に強い。オキナワンとしてのプライドが強いから絆も強いよ。

N ウチナーンチュ文化で最も大切なことはなんですか？

G 子どもたちに文化を伝えていくことね。このアンダーギー作りだって見て、子供やあなたたちみたいな若い人が少ないでしょう。若い人はあんまり自分はオキナワンだって感じなくなってる。文化についてもあんまり理解してないわね。

N 自分のアイデンティティについて聞かれた時、オキナワンとジャパニーズどっちを答えますか？

G ジャパニーズ、ね。といっても、私はジャパニーズもオキナワンも同じと考えてる。オキナワンは独特の文化をもっているから、特徴はあるけどオキナワンもジャパニーズの一部ね。

N ウチナーンチュとナイチの違いは何だと思いますか？

G 言葉、フード、音楽などかな。

N あなたから見て、ハワイのウチナーンチュ・コミュニティが抱えている問題はなんだと思いますか？

G 若い人たちが沖縄の文化を理解しないことね。さっきもいった通り若い人に伝えていくことが課題ね。若い人はあまりオキナワンの文化について理解してないから、少しずつでも伝えていかなきゃいけないってたくさんの人が思っているはずだわ。

観察、感想（中西亜弥子）

インタビューの最初の段階で、ウチナーンチュの文化の大切な部分についての質問とジャパニーズとナイチの違いの質問とをうまく伝えられなかった。質問の仕方を変えて、結果的にどちらの答えももらうことができたが、どのように質問するべきか練り直す必要があると感じた。グレンダさんはこのお祭りに参加しだしてからそんなに年月は経過していないが、オキナワンの文化や考え方は十分すぎるほど彼女の中に浸透していた。今まで聞いて知っていたつもりでいたオキナワンの文化のつながりの強さ、アイデンティティの強さを体感した。

<白水 補記> グレンダのアイデンティティについての語りはいわば一つの典型を示している。ジャパニーズかオキナワンかと問われれば「ジャパニーズ」と答える。だが、「といっても、私はジャパニーズもオキナワンも同じと考えてる。オキナワンは独特の文化をもっているから、特徴はあるけどオキナワンもジャパニーズの一部ね」ともいう。強いていえば「日系人アイデンティティ型」だが、「多アイデンティティ共在型」と紙一重ともいえそうである。

<No.3> ロイド

生年 1958年 男性 妻はナイチ

世代 四世

HUOAメンバークラブ Nakagusuku Sonjin Kai (中城村人会)

職業 日系大手電気製品販売会社重役

インタビュアー：中西亜弥子 (当時駒澤大学2年生)

2012年9月1日 於：トマス・ジェファーンソン小学校キッチン (アンダーギーの生地作り) 会場の休憩室

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

中西 (N) オキナワンとしてどんな活動をしていますか？

ロイド (L) このオキナワン・フェスティバルとスポーツ大会です。ソフトボールを一緒にやろうと誘われたのがはじめでした。あとはゴルフもやったかな。

N 初めてオキナワン・フェスティバルに参加したのはいつですか？

L 参加し始めて25年経つ。

N ところで、ウチナーンチュ・スピリットとはどんなものだと思いますか？

L 勤勉、相互扶助、コミュニティを大事にする、友情を大事にする。

(妻) ウチナーンチュはみんなよく働かし、助け合いの精神がとても強いと思う。この人と結婚してからウチナーンチュの人たちと接する機会がかなり増えたんだけど、とてもいい人が多い。これはオキナワンだからってわけじゃないかもしれないけど。面倒見のいい人が多いわね。

N ウチナーンチュ文化で最も大切なことはなんですか？

L 言葉も、踊りも、食べ物も、音楽も……すべて大切。このお祭りだってオキナワンにとって大切なもののひとつだよ。

(妻) オキナワンは特別な文化を持っている。ジャパニーズも多少はもっているけど、オキナワンほど特徴はないし、これほど誇りを感じて生きていない。誇りを持っていることが一番大切なんじゃないかな？

N 自分のアイデンティティについて聞かれた時、オキナワンとジャパニーズとどっちを答えますか？

L オキナワン。私の一族はみんなオキナワンで、僕は四世だけど100%沖縄の血を受け継いでいるんだ。だから、ジャパニーズというよりもオキナワンのほうが自分を表すのにふさわしいと思っている。

N ウチナーンチュとナイチの違いは何だと思いますか？

L オキナワン・スピリット。

(妻) 彼ら (オキナワン) はみんな自分がオキナワンであることにとても強い誇りを持っていると思う。ナイチよりもオキナワンの方がそういうスピリットが強いと思う。だから、こんな風が集まってフェスティバルをやるし、実際に実現できてるんじゃないかしら。

- N あなたから見て、ハワイのウチナーンチュ・コミュニティが抱えている問題はなんですか？
L 若い世代の人たちの協力が少ないことだね。

観察、感想（中西亜弥子）

この夫婦は旦那さんがオキナワン、奥さんがナイチの子孫であった。旦那さんは口数の少ない人で、オキナワンについて聞いているのにナイチである奥さんの方が積極的に答えてくれたのが印象的だった。奥さんの発言も的を射ていたようで奥さんの話に旦那さんはしばしば頷いていた。奥さんはナイチであるがオキナワンのコミュニティの様子をよくわかっているようで、オキナワンがどれだけ誇りを持っているか、オキナワンのコミュニティがどれだけ親密なものであるかを語ってくれた。また、旦那さんは自分が100%沖縄の血を受け継いでいることを語る際にとっても積極的であった。そこからやはりアイデンティティに対してのこだわりが人一倍強いのではないかと思った。

<白水 補記> ロイドは、自分はオキナワンであると明言している。妻（ナイチ系）もそれを認めているということもあり「オキナワン・アイデンティティ型（非日系型）」に属するといっただろう。

<No.4> タカコ

生年 1934年 女性

世代 二世

HUOAメンバークラブ 中城村人会

職業 元看護師

出身 ハワイ

インタビュアー 麻生亮（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日 於アンダーギー生地作り会場トマスジェファーソン小学校キッチン

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

麻生亮（R） オキナワン・フェスティバルに参加されるのは何回目ですか？

タカコ（T） 5回目です。

R 初めて参加されたのはいつでしょうか？

T 2002年です。

R 何を楽しみにこの祭りに来ていますか？

T エンターテインメントを楽しみにしています。

R ありがとうございます。エンターテインメント…たとえば（上手く英語が出てこなくて戸惑っている）

T 私にとってはこの祭り全体がエンターテインメントなの。

R ありがとうございます。お祭り全体の中で気に入っていることはなんですか？

T 食べ物が入っています。毎年、沖縄の食べ物を友だちと食べることが楽しみです。

R それはいいですね。ところで、あなたにとってウチナーンチュ・スピリットとは何でしょうか？

T んー、祭りに参加して協力し合うことですかね。

R ウチナーンチュ・カルチャーの中でもっとも重要なものは何だと思いますか？例えばウチナーグチ、沖縄フード、踊り、音楽など…

T ウチナーグチとは何ですか？

R 沖縄の方言のことです。

T そうですか。私は、何ごとも一緒に協力し合うことだと思います。

R あなたは、オキナワンの人たちは民族的にも日本人なのかそれとも民族的には沖縄固有の民族に属しているのかどう思われますか？

T 基本的には日本人だと思います。しかし、沖縄人としての誇りは持っています。

R あなたはハワイのオキナワン・コミュニティにおいて目立った問題やこれから解決しなければいけない問題があると思いますか？

T アメリカ化です。子どもたちはハワイで生まれ育ちアメリカの文化だけを学んでいってしまっています。親の私がすでに二世なので、(日本文化や精神を)うまく伝えられないことが多いですね。

R とても難しい問題ですね…。今日はインタビューに答えていただき、ありがとうございました。

T どういたしまして。

観察、感想 (麻生亮)

タカコさんとのインタビューの中で感じたことは、彼女はウチナーンチュとしての自覚を持っているということです。お祭りに来る楽しみは「エンターテインメント」であり、ウチナーンチュ・スピリットに対する意見は「祭りに参加して協力し合うこと」ということであつたので、オキナワン・フェスティバルが彼女にとってとても大きな意味を持つ催しであると同時に沖縄への愛着が強いと思いました。

「あなたは、オキナワンの人たちは民族的にも日本人なのかそれとも民族的には沖縄固有の民族に属しているのかどう思われますか？」の質問に対しては、「基本的には日本人である」と答えていました。ウチナーンチュとしての誇りも持っていますが、ウチナーンチュは民族的にも日本人であると思っていることについては、その次の質問の回答にポイントがあると思いました。「あなたはハワイのオキナワン・コミュニティにおいて目立った問題やこれから解決しなければいけない問題があると思いますか？」の質問において「(子どもたちの)アメリカ化」が問題だけれど、自分たち親が(日本文化や精神を)「うまく伝えられない」と答えていました。自分たちの世代が受けてきた教育が日本文化に基づくものでそれはよいことだという自覚があるのでしょうか。日本人としてのプライドがあるのだろうかと思いました。

<白水 補記> 次世代、次々世代のアメリカ化を心配するタカコは、日本文化のなかには貴重な

ものがあって、それは後世にも残さなければならないと考えているようだ。それをうまく伝えられない自分もどかしいのだろう。後世に伝えるべき「良きもの」のなかには実は沖縄文化に起源をなすものもあるはずだが、彼女の世代は、すべてひっくるめて「日本文化」と考えるように教育されたのである。

タカコはウチナーンチュとしての誇りは持っているが、そのエスニック・アイデンティティは「日系人アイデンティティ型（日系型）」に属するといっただろう。

<No.5> ローザ

生年 1947年 女性

世代 三世

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小祿字人会）

職業 元教師

出身 ハワイ

インタビュアー 麻生亮（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日 於アンダーギー生地作り会場トマスジェファーソン小学校キッチン

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

麻生亮（AR） オキナワン・フェスティバルに参加するのは何回目ですか？

ローザ（R） 今年で20回目になります。

AR 初めて参加されたのはいつでしょうか？

R 1992年です。

AR 何をたのしみにこの祭りに来ていますか？

R 今日のようなアンダーギーをミックスして作ることやエンターテインメントかしら。ステージでやるエンターテインメントが楽しみね。

AR みなさん楽しそうにやっていますよね。

R 一年に二日しかない祭りだから、みんなここで再会するのを楽しみにしているのよ。

AR では、オキナワン・フェスティバルの開催は皆さんにとっても貴重な出会いの場になっているのですね。

R その通りよ。

AR わかりました。では、あなたにとってウチナーンチュ・スピリットとは何ですか？

R オキナワン・フェスティバルにみんなで参加して協力し合うことね。

AR ウチナーンチュ・カルチャーの中でもっとも重要なことは何だと思いますか？

R それは、お互い助け合うことね。

AR あなたは、オキナワンの人たちは民族的にも日本人なのかそれとも民族的には沖縄固有の民族に属しているのかどう思われますか？

R 沖縄民族に属していると思います。オキナワンだと思っています。

AR あなたはハワイのオキナワン・コミュニティにおいて目立った問題やこれから解決しなけ

ればいけない問題があると思いますか？

R どれだけ多くの方が自分のことをオキナワンだと思っているかだと思います。

私は三世だけれども少しなら日本語も話せるから、そう教育されてきたから。でもそういった教育も少しずつなくなっている気がするわね。全体的には分からないけれども。

AR ありがとうございます。とても貴重なお話を聞くことができました。本日はインタビューに答えていただき、ありがとうございました。

R どういたしまして。

観察、感想（麻生亮）

ローザさんは三世でしたが、日本語も少しだけ話すことができ日本的な教育も受けられているのでタカコさんとはまた違った視点から見たウチナンチュについての意見を聞くことができました。

ローザさんは今回でオキナワン・フェスティバルに参加してからちょうど20年であり、とても長い間祭りに関わっています。彼女も毎年オキナワン・フェスティバルを通じて友人に会うことを楽しみしており貴重な出会いの場となっている。ウチナンチュ・スピリットについても「この祭りに参加して助け合うこと」と語っています。ウチナンチュとして祭りに参加することの大切さがこの言葉から読み取れました。そして、彼女は自らをウチナンチュであると思っており、さらにはコミュニティの中での問題として、どれだけの方が自らをウチナンチュと思っているかという問題をあげています。祭りにも長年参加しているとともに、ウチナンチュとしてのプライドを持って参加しているのだと分かりました。もっと若い世代にも参加してもらい彼女の意志を広めていけるような環境にしていくことをすることで、良い解決策にたどり着ければよいと思います。オキナワン・フェスティバルを通じて新たなコミュニティとの繋がりを作ったり、世代を超えた交流をすることで祭りを楽しむだけでなく、それぞれの民族意識も次第に強くなっていくのだと感じました。

<白水 補記> オキナワンは沖縄民族に属していると明確に答えるローザだが、多少とも日本語が話せることを誇りにしている。そして日本語が話せない人びとが増えることを心配している。彼女は強いていえば「オキナワン・アイデンティティ型」に属するが、彼女のなかにもジャパニーズとオキナワンが無理なく共存しているようである。

<No.6> ソニア

生年 1951年 女性

世代 三世 夫はナイチ三世

HUOAメンバークラブ Ginowan Shijin Kai（宜野湾市人会）、Haneji Club（羽地クラブ）

職業 会計士

出身 ハワイ

インタビュアー 麻生亮（当時駒澤大学2年生）

2012年9月2日 於アンダーギー生地作り会場キッチン

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

麻生亮（R） オキナワン・フェスティバルに参加するのは何回目ですか？

ソニア（S） 15回目になります。

R 初めて参加されたのはいつですか？

S たしか、1990年だったと思います。ここ数年は毎年参加しています。

R そうですか。何を楽しみにこの祭りに来ていますか？

S フードやアンダーギーを作ることが楽しみです。

R あなたにとってウチナーンチュ・スピリットとは何ですか？

S 新しい出会いを楽しむことです。

R 新しい出会い？

S オキナワン・フェスティバルには色々な民族の人たちが参加しているから、そのような人と出会うのを楽しみにしているということかしら。

R ありがとうございます。ウチナーンチュ・カルチャーの中でもっとも重要なものは何だと思えますか。

S 一番重要なこと…。

R 例えば、ウチナーグチや、沖縄フード、沖縄の踊り、琉球音楽など…。

S 沖縄の踊りかしらね、昨日もこのオキナワン・フェスティバルの夕方の盆踊りで踊ったわ。

R あなたは、オキナワンの人たちは民族的にも日本人なのかそれとも民族的には沖縄固有の民族に属しているのかどう思われますか？

S んーと、民族的にも日本人だと思います。

R なぜそう思われますか？

S 日本にも様々な町や市があると思うけど、それぞれ違った特徴があると思うから、それを含めて日本の民族だと思っています。

R わかりました、ありがとうございます。あなたはハワイのオキナワン・コミュニティにおいて目立った問題やこれから解決しなければいけない問題があると思えますか？

S 難しいですね…。ちょっとわかりません。

R そうですか。例えば、アメリカ化してきたとか…

S なるほど。しかし、ちょっと回答が思い浮かびませんね。

R わかりました。本日はインタビューに答えていただき、ありがとうございました。

S どういたしまして。

観察、感想（麻生亮）

ソニアさんは今回で15回目の参加ということでしたが、初めて参加した1990年から毎年参加しているわけではありませんでした。なぜ参加できなかった年があるのかを聞いていればもっと話す内容に厚みが出ていたと思います。彼女は祭りでフードやアンダーギーを作ることが毎年楽しみにしていることだと語っていました。そしてウチナーンチュ・スピリットとは「新しい出会いを楽し

むこと」だと語っていました。今回彼女は、妹さんと娘さん、そしてお孫さんと一緒に祭りに参加しアンダーギーを作っていました。彼女の言葉通りアンダーギーを作ることがとても楽しそうでしたし、一家全員で参加することで文化を継承することに繋がるのではないかと思いました。それぞれ違う世代の人が同じ場所で同じことをするという機会は貴重だと思いますし、お互い得るものが多いはずで。今回で30回目を迎えるオキナワン・フェスティバルですが、長い歴史を築いていく中で若い世代がどれだけついて来るかという課題もあると思います。まずは、家族内からきちっと前の世代の意志や文化を受け継いでいく必要があると思います。

<白水 補記> ソニアは断続的にオキナワン・フェスティバルでボランティアをしている女性である。沖縄文化にはあまり詳しくないようだ。それもあってか、明確に「沖縄系は民族的にジャパニーズだ」といつている。

感想2 (麻生亮)

ハワイ調査に備えて、相模原合宿でインタビューの練習をしていたので、少しでも学んだ多くのことを生かそうと試みました。しかし、英語でのインタビューに戸惑ってしまい英語を聞き取ること必死になり上手く相手の答えを引き出せなかったことが率直な感想です。オキナワン・フェスティバルでインタビューをして感じたことは、このお祭りをみな楽しみにしているということでした。インタビューをする前は、ここに参加している人たちは自分たちのことをウチナンチュだと思い、なにか強い信念を持っている人が多いと思っていました。しかし、実際に話してみると全ての人が自分のことをウチナンチュだと思っているわけではなく、ただ純粋に仲間と会うことを楽しみにしている感情の方が強く感じられました。

インタビューをさせていただいた二世、三世の方たちは親や祖父、祖母が沖縄からの移民ということで、オキナワンに関する質問をすると具体的な内容や、育ってきた環境がアメリカ文化だけではないということが分かりました。今回の調査で四世や五世の意見も聞いてそれらの意見と比較をすることが出来れば良かったと後悔しています。日本においても若者の「～離れ」など多くの問題があります。ウチナンチュの抱える問題も時代とともに変化し、やはり焦点となるのは若者の存在であると思いました。解決策はなかなか見つけることが出来ませんが、見つけなければ次第にオキナワンとしての自覚も薄れていってしまいます。一番良い方法は、若者が自覚を持ち自ら行動することだと思います。どのような問題でも当事者の意識改革が必要ではないかと思います。物事の解決へのプロセスは似ているように感じることはできたのは良かった点だと思います。

自分が何者なのか(日本人であるだとか、アジア人であるだとか)という民族的な意識や感情は他の民族と一緒にいることで芽生えてくると思います。ハワイはマルチカルチャーであるために沖縄県に住むウチナンチュよりも日頃からエスニシティについて考える機会が多いのではないかと感じました。

<No.7> キース

生年 1925年 男性
世代 二世

HUOAメンバークラブ Kanegusuku Sonjin Kai（兼城村人会）

職業 元アメリカ政府関係

住所 不明

インタビュアー 金澤碧衣、内藤尋乃（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 主として日本語

[インタビュー核心部分抜粋]

金澤・内藤（KN）オキナワン・フェスティバルには何回くらい来ますか

キース（K）1997年以来毎年。

KN このフェスティバルの何が楽しみですか？

K いろんな人が来ているのが楽しい。違ったエスニック・グループね。日本人も白人もみんなね、違った人が来ますからね。沖縄人ばかりじゃない。いろんな人が来ている。

KN ウチナーンチュ精神とは何でしょう？

K 頑張ることね。なんでも負けないように頑張ることね。

KN ウチナーンチュの文化の中で最も重要なものは何でしょう？

K 私は家族だと思うね。家族が一番だいじなもの。

KN オキナワンはジャパニーズとは別の独自のエスニック集団だと思いますか？

K 自分たちの時代は日本人だと思っていた。だけどオキナワンは日本人とは少し違っていった。それに今はだんだんオキナワンが混血しているよね。今頃はね、若い人達もね、自分の祖先のエスニックは何なのかと考えるようになった。それは大丈夫です。わたしはオキナワンです、日本人ですっていても大丈夫。別に問題ではない。オキナワンだ、という人はオキナワンの誇りを持っているからでしょう。たくさんの人、特に若い人はオキナワンである主張している。それは前にはなかった。

KN ハワイのオキナワン・コミュニティが抱える主たる問題は何でしょう？

K 私はクラブ（村人会）が好きです。二世たちがなくなったら、三世はどう沖縄の文化を続けるか、まだはっきりしていないね。それに、もう四世の時代だからね。村人会の人達が若者たちを村人会（の活動）に引き入れることができるかどうか、というのが最大の問題です。（もし引き入れることができたら）私たちの文化は発展しつづけることができる。

観察、感想（金澤、内藤）

この方は1年生から10年生まで公立学校（英語学校）のあと1時間だけ日本語学校で勉強していたそうで、質問の答えも大部分が日本語で答えていただきました。この方は二世ということもあり、二世から三世にはどのように文化を継承していくのかということがまだ決まっていなかったとおっしゃっていました。このことは、フェスティバルに参加する人は多くいたとしても、活動の中心になる人がいないということを表しているのではないかと思いました。また、若者をクラブ（村人会）に集めて、活動することが今後の問題であるとおっしゃっていました。今では、オキナワンの中でも様々なエスニックが混ざっていて、そのことで自分がどのエスニックであるかと主張する幅が広がって

いるのではないかと感じました。

<白水 補記> 親切なキースは、インタビュアーが日本人学生だったので、質問に対し日本語で答えてくれた。彼は10年間日本語学校に通ったという。1925年生まれだから、日米開戦直前まで通ったことになる。ただ、彼の回答はかなり「意識」が必要だった。上記の記録は学生が速記してきたインタビュー記録を読み、文脈から彼の意を解釈して書き直したものである。それでも大体の意味は通ったと思う。

キースの語りのなかで印象的なことの一つは、エスニック・アイデンティティについての質問である。当時87歳の二世である彼が、若い人が自分たちは（ジャパニーズではなく）オキナワンだ、という昨今の現象を「大丈夫だ」と認めているということである。彼自身はまだそうは言い切れないうのだが（だから「日系人アイデンティティ型」に属するといっただろうが）、オキナワン・アイデンティティの存在を認めているということの意味は大きい。まだ多いとはいえないと思われるが、少なくともオキナワン・フェスティバルにボランティアで参加する高齢の二世にこのような見解を示す人がいるということは、将来的にはかなり一般化する可能性がある。

さらに、彼の語りのなかで注目すべきは、今日の村人会の実態と将来の問題が浮き彫りになっている点である。オキナワン・フェスティバルのボランティアに、誘えば来てくれる若者はいるが、中心になって働こうという人は多くない。村人会（つまりHUOAの屋台骨）の活動に若い人を引き入れることができれば沖縄の文化は発展しつづける、と彼はいう。ということは裏を返せば、引き入れることができなければ沖縄文化の維持継承は危ういということになる。いま、その瀬戸際にある、とも解釈できる。核心を衝いた発言だといっただろう。一方で、村人会とは関係なく、様々な沖縄舞踊や沖縄系の太鼓のグループができてつつある。そのほとんどが若い人がメンバーである。極論すれば、楽しくて目立つ芸能等には参画するが、きつい、地味な仕事にはあまり参加しないということかもしれない。この状態をキースはなんといいようだろう。

<No.8> ティファニー

生年 1980年 女性

世代 四世

HUOA所属クラブ Ginowan Shijin Kai（宜野湾市人会）

職業 図書館司書

住所 ホノルル

インタビュアー 金澤碧衣、内藤尋乃（当時駒澤大学2年生）

2012年9月1日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

金澤・内藤（KN）オキナワン・フェスティバルには何回くらい来てますか

ティファニー（T）もう20回くらい来ているわ。最初に来たのは5、6歳の時じゃないかしら。

KN このフェスティバルの何が楽しみですか？

T みんなの協力を見るのが好き。文化を「共有」(sharing)しようとしてみんなが協力している。そのための準備も一生懸命やる。私たちは共有するものをたくさん持っているのよね。

KN ウチナンチュ精神とは何でしょう？

T 私はウチナンチュの精神は私たちの文化に誇りを持って、精神を共有し、保持するために意欲的になることだと思ってる。問題は、文化とは何かということを理解するのが簡単ではないということ。だから、何をすればいいか、どこに向かっていけばいいかが難しい。だからリーダーたちはほんとうのウチナンチュになるための方法の共有を目指して熱心に語り掛けているのだと思う。

KN ウチナンチュの文化の中で最も重要なものは何でしょう？

T 文化全体じゃないかしら。どれか一つが大切とは考えていない。お互いに助け合いをするということを覚えておく必要があって、そのうえで、食べ物（オキナワン・フード）や言語（ウチナグチ）や沖縄音楽をおこなうことができると思う。

KN オキナワンはジャパニーズとは別の独自のエスニック集団だと思いますか？

T 私はよくわからない。オキナワンはどこの民族から生まれてきたのかわからないくらいいろいろな文化を併せ持っている。それに混血も進んでいる。オキナワンは各自でそれぞれ異なると思う。

KN ハワイのオキナワン・コミュニティが抱える主たる問題は何でしょう？

T 沖縄文化の維持継承ができるかどうかだと思う。しかし、このためにたくさんの若者が新たな挑戦もしていることがだいじだと思う。たとえば、2年前カピラニ・コミュニティカレッジで3世代の視点でエイサー祭りをした。そして毎年続けようとしている。これはオキナワン・フェスティバルほどではないけど、より芸術性が高いと思うわ。

観察、感想（金澤、内藤）

インタビューしていても印象に残った部分は、しきりに共有（sharing）という言葉をおっしゃっていた所です。私は実際にアンダーギー作りのボランティアに参加して、上の世代の方がたくさん作業しているなという印象を受けました。つまり、年配者が目立つ。このことを踏まえても、次の世代にいかにかウチナンチュの精神や活動を受け継いでいくかという部分が重要視されているのではないかと、そのため今、実際に活動に参加しているこの方も共有という部分を強調して述べていたのではないかと思います。また、どのエスニック・グループに自身が所属しているのかという問いに対して、わからない、とおっしゃっていて、四世になると様々な民族背景を持った人が混ざり合っているため、自身がどのエスニシティを持っているかを判断するのが難しくなっているのではないかと思います。そのため、このお祭りに関しても民族的バックグラウンドでつながるのではなく、共通の精神といった民族を超えた交わりが必要になってきているのだと考えさせられました。

<白水 補記> ティファニーの語りから、彼女が客観的なものの見方をする人であることがわかる。彼女はHUOA内ではこの時点で重役を担っているわけではないはずだが、視点はすでにリーダーといってよい。それは彼女の宜野湾市人会におけるボランティア歴の長さや高学歴の知識人であ

ることなどに起因するものであろう。そのような人だからこそ、自らのエスニシティを簡単には特定できないのかもしれない。つまり、沖縄文化が好きということと民族的帰属意識とは必ずしもイコールではないということかもしれない。そのあたりはもう少し掘り下げたいところだが、英語を用いるインタビューでそこまで要求するのは学部の2年生に対しては酷かもしれない。ともあれ、彼女の語りから、「このお祭りに関しても民族的バックグラウンドでつながるのではなく、共通の精神といった民族を超えた交わりが必要になってきているのだ」と考えたこの学生の感想は、私だけでなく読者に対する大きな問いかけでもある。果たしてエスニシティを超えたエスニック・フェスティバルとは何なのだろう？

<No.9> ボニー

生年 1943年 女性

世代 三世 夫はナイチ

HUOA所属クラブ Yomitan Sonjin Kai (読谷村人会)

職業 美容師

住所 ホノルル

インタビュアー 金澤碧衣、内藤尋乃 (当時駒澤大学2年生)

2012年9月1日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

金澤・内藤 (KN) :オキナワン・フェスティバルには何回くらい来てますか？

ボニー (B) 30年間、毎年来ています。

KN オキナワン・フェスティバルのなにが楽しみですか？

B 全てよ。ここで食べられる料理やお菓子、エンタテイメント……全て好き。

KN ウチナーンチュ精神とは何でしょう？

B 調和、ハーモニーだと思う。

KN ウチナーンチュの文化の中で最も重要なものは何でしょう？

B スピリット、精神だと思う。

KN オキナワンはジャパニーズとは別の独自のエスニック集団だと思いますか？

B :独自のエスニック集団だと思う。なぜなら、言語が異なるから。しかし、私は日本の文化も大好き。つまり、日本文化と沖縄文化のまじりあった状態が私は好き。

KN ハワイのオキナワン・コミュニティが抱える主たる問題は何でしょう？

B フェスティバルの維持、継承が問題ではないかと思う。これまでの中心だった年長世代は年を取っていき、だんだん参加できなくなる。だから次の世代が担わなければならないが、若い世代にはインターマリッジ (異民族結婚) している人も多いし、ウチナーンチュ意識が高くない人も少なくない。だから、かれらのなかには、なぜ自分たちがこのフェスティバルを続けていかなければならないか疑問に思っている人もいるでしょう。このフェスティバルを担っているのはほとんどすべてボランティア。なんと2000人以上のボランティアで成り立っている。年長の世代はあまり文句

も言わずにボランティアとして働いてきたが、次の世代はどうでしょうね。これだけ大勢のボランティアが集まるでしょうか。ほら、見てごらん。たくさんのコップを箱に入れてお客に水を配っている若者が大勢いるでしょう？彼らは高校生で、学校の公共サービスという授業の一環で来ているものもいる。つまり、ここでボランティアをすれば一定の単位がもらえるわけ。アメリカではコミュニティ・サービスをだいにする。だからこのフェスティバルには沖縄系ではない、コミュニティ・サービスのために来ている人もいるわけ。オキナワンが今後どれだけたくさんボランティアで来てくれるか、それが問題よね。

観察、感想（金澤、内藤）

ボニーさんには、カルチャーテント内の生け花のブースで活動されていた時にインタビューをさせて頂いた。このブースは、日本人の先生をオキナワン・フェスティバルに招き、その先生の作品を展示していた。日本の文化である生け花を紹介するブースで活動されていることからわかるように、ボニーさんは日本の文化をとっても好んでいるようである。私は様々な国へ行き、多くの人と話してきたが、日本の文化の話になるといつも思うことがある。それは、われわれは日本人でありながら、日本の文化をなぜそこまで大切に思えないのか、愛せないのかということである。自分でも未だにこの答えは分からない。嫌いではないが、そこまで重要に思ったことは正直ないと思う。海外の人と話すときに、日本の文化の重要性や素晴らしさを感じるのである。多分これは、私たちにとって日本文化が「当たり前」になりすぎているからではないかと思う。

ではハワイのオキナワンの場合はどうか？ボニーさんに代表されるように、ハワイのオキナワンの年長世代は、最近の若者がオキナワンの文化をあまり重要視していないと感じているようだ。これは日本の若者と同じ状態ではないか。ハワイのオキナワンの地位は、すでにハワイの社会の中で認められ、存在感も大きい。同じようにオキナワンの文化も確立したものとなっているのではないか。オキナワンの若者は、オキナワンの文化がハワイにあるのは当たり前という環境で育っているので、そこまで熱心に、または自発的にオキナワンの文化をどうにかしようという考えに至らないのではないか。その部分を理解している若者がどのくらいいるのかも、今後のオキナワン文化の継承に関わってくるのではないか。

また、ボニーさんのお話の中で、初めて出てきた単語がある。それが、「調和」である。どのような意味で、または人と人とのことを指しているのか、文化のことなのか、その両方なのかなど、より掘り下げて聞ければよかったと後悔している。推測ではあるが、他人を思いやる心、自分だけよければよいと考えるのではなく、他を思いやる気持ち、助け合いの思いなどのことをいっているのではないかと思う。

<白水 補記> ボニーは自分をオキナワンであると明確に規定しているようにみえる（「オキナワン・アイデンティティ型」）。そのうえで、生け花に代表される日本文化も理解し、実践する自分に強い誇りを持っている。1990年代以降、自分はオキナワンである、ウチナーンチュである、と明言する人が増加してきたが、よく聞いてみると日本人性（日本的なもの、日本的な部分を持つこと）に誇りを持つ人が少なくない。年長であるほどその傾向が顕著である。三世としてはやや年長のボニーにもそれが見られる。オキナワンであることに強い帰属意識を持つが、だからといって日本文

化を排斥するのではない。むしろ自分の文化の一部として誇りに思う気持ちもある。「オキナワン・アイデンティティ型」のホンネの部分を表す例のひとつであるといっていよう。

<No.10> ベラ

生年 1977年 女性

世代 四世（父方：オキナワン、母方：ポルトガル、アイルランド、先住ハワイアンなど）

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小禄字人会）

職業 ビデオ・ジャーナリスト

住所 ホノルル

インタビュアー 大浪優紀、鈴木美咲（当時駒澤大学3年生）

2012年9月1日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

大浪・鈴木（OS）〈生年や所属クラブなどを訊いた後で〉お仕事をお伺いしていいですか？

ベラ（V）私はビデオ・ジャーナリストよ。

OS どんな内容のお仕事ですか？

V 今は新聞や雑誌のインターネット版を作っているの。『ホノルルマガジン』『ハワイビジネスマガジン』といった雑誌のウェブサイトや、昔は新聞のウェブサイトも作っていたわ。

OS このフェスティバルに来られたのは何回目ですか？

V 初めてよ。叔母が来るはずだったけど来なくなって、代わりに行ってってくれて電話があったの。だから私がアンダーギーを作りに来たわけ。

OS フェスティバルでは何が楽しみですか？

V もちろんフード（食べ物）よ。なんといってもフード！ここのは新鮮だしね。私は日本食が大好きなの。それとボンダンス（盆踊り）も好きよ。今日は夕方ここでボンダンスをやるのよね。楽しみだわ。

OS 話は変わりますが、ウチナーンチュ・スピリットというのはどんなものだと思いますか？

V うーん、ウチナーンチュ・スピリットね、うーん……〈しばらく考え込む〉たぶんハッピー、ということかな。家族全体がハッピーになる。ストレスがなく、おいしいものをたくさん食べて、みんなでハッピーになりたいと思う。幸運に恵まれ、心配事がない（go lucky, no worry）それがウチナーンチュ・スピリットじゃないかな。だからみんな長生きなんだよ。200年だって生きるんじゃない？

OS ウチナー文化のなかで最も重要なものというのは何でしょう？

V コミュニティじゃないかな。お互いに助け合う、一緒に働く、共に食事を作り、一緒に食べる、そんな関係。それがウチナーンチュの文化の一番大事なところじゃないかな。みんな家族と同じとか家族の延長のような感じ。私自身、アメリカ人ととても違うと思うときがある。

OS オキナワンは日本人（Japanese）と同じエスニック集団に属していると思いますか、それとも別の独自のエスニック集団だと思いますか？

V 別の独自の集団だと思う。いろんな点で違うからね。オキナワンは日本から来ていることはたしかだけど、ここのオキナワンを見ていると違うよね。

OS あなたの考えでは、ここのオキナワン・コミュニティで問題だなど思うことはありますか？

V うーん、よくわからない。でもこれからどんどん混血していくから、オキナワンの特徴を強く維持していくのはむずかしいかもしれないね。

OS なるほど。どうもありがとうございました。

感想・観察（鈴木）

ベラさんはとても元気な人であった。初めは20代後半くらいだと思っていたので、1977年生まれだと聞いたときは本当に驚いた。フェスティバルに参加するのは初めてということなので、オキナワン・スピリットやコミュニティが抱える問題など分からないのではないかと思ったが、しっかり答えてくれた。問題は私が理解しきれなかったことである。Help each otherやWork togetherなど他の方と似た答えであったが、オキナワンである父がそう言っていたのか、それとも何かフェスティバル以外のコミュニティの活動に参加したことがあってそう感じたのか、聞いてみればよかった。

他の方に比べて話すスピードが早めだったように思う。ジャーナリストという仕事柄か、とてもはっきりした話し方であった。

インタビュー途中に周りにいたLilyさんやValさんと話していたが、その内容が分かればもっと内容を濃くできたと思う。去年のフェスティバル参加時よりは積極的になれたと思うが、英語が分からなくてコミュニケーションが取れないことを悔しく思った。

英語でのインタビューだったのだが、ここで分からない時に笑ってしまうという癖が出てしまった。分からなかったら聞きなおすなどして、きちんとしたインタビューにすればよかった。また、大浪さんに頼りすぎて、ほとんど自分では何も聞いていないことに気がついた。もともと話しをするのは得意ではないが、こういうときに積極的にならないとせっかくのチャンスを無駄にしているもったいないと反省している。

<白水 補記> 初めてオキナワン・フェスティバルに参加する人はフード（沖縄そば、チャンプループレート、サーターアンダーギー、巻き寿司など、沖縄食やホットドッグなどのアメリカン・フード）が楽しみ、という人が多い。初めて参加したベラもフードが楽しみ、といっている。だが、初めてにしてはウチナンチュ・スピリットについて自分なりの考えを持っているし、沖縄文化の重要部分をコミュニティであると指摘している。一般的には、何回も参加するうちに学習が進み、こうした内容のある回答をする傾向にある。その意味で彼女はやや例外的である。これは職業がジャーナリストであることと関係があるのかもしれない。自分自身のエスニック・アイデンティティについて明言しているわけではないが、オキナワンは日本とは別の独自のエスニック集団だと考えていることから「オキナワン・アイデンティティ型」に属するといっていよう。

<No.11> ヒデオ

生年 1945年 男性

出身 三重県 1971年ハワイ移住

HUOAメンバークラブ 無所属

職業 スーパーマーケット ヘッドバイヤー

インタビュアー 大浪優紀、鈴木美咲（当時駒澤大学3年生）

2012年9月2日 オキナワン・フェスティバル会場にて

使用言語 日本語

[インタビュー核心部分抜粋]

大浪・鈴木（OS）日本のご出身と伺いましたが、日本のどこですか？

ヒデオ（H） 父親が沖縄出身。自分は三重県で生まれたが、5歳から沖縄に住んだ。

OS ハワイに来た理由などを教えてください。

H ハワイに親戚が沢山いて、また軍人さんにも友達が沢山いた。彼らに沖縄よりアメリカの方がいいよと言われ、永住権申請したらなんとか取れたため、1971年11月ごろハワイに移住した。だから新しい一世かな。

OS どの村人会に所属しているのですか？

H どこにも所属していない。オキナワン・コミュニティとの関りは年1度のオキナワン・フェスティバルだけ。

OS お仕事は何をされているのですか？

H ドン・キホーテ（日系のスーパーマーケット）、食料品部門のヘッドバイヤー

OS だから今日、「平和通り」（沖縄物産のテント）でボランティアをしているのですね。

ところで、こちらに来てオキナワンの人びとに接して感じたことはありますか？

H こちらの沖縄人は、自分たちはJapaneseじゃないんだよっていうね。じゃ、何人かって聞くとOkinawanって。Okinawanということを知り、すごい自慢したがる。

OS それってなんででしょう、Japaneseって言われたくなくて、Okinawanだって思われたいのでしょうか。

H そのくらい彼らがプライドを持っているってことかな。素晴らしい。足の引っ張り合いって言うのがほとんど無いのね。

OS 足を引っ張らないといえば、オロク（小禄）クラブの人たちが手掛けた「小禄レストラン・プロジェクト」という研究を見ても、オロクの人たちはみんなで助け合ってレストランをどんどん開業していったそうです。普通、同じ民族がレストランとかをいっぱい作ったら、みんなライバルになるのかなと思ったら、そうじゃなくて、Orokuでひとつになってみんなで助け合っていこうみたいな、オキナワン・スピリッツとか、オキナワンの精神みたいなものを感じました。

H そうだね。ああいうのは確かに、ハワイならではものだと思うけど。こんな島国だからハワイ人と似てるんじゃない。それが、オキナワン・スピリットっていうのが、ハワイに多分マッチしてるところがあると思うんだよね。ハワイの人も、あの一、アウトサイダーを受け入れるっていうのがあるでしょ？外国人であれ日本人であれ結構受け入れてるでしょ。そこが素晴らしいところだよ。

OS あの、色々質問させてもいただいてもいいですか？

H いいよ。（笑）知ってることなら。

OS ありがとうございます。この、オキナワン・フェスティバルに参加するのは何回目ですか？

H 多分25回以上だと思う。

OS おおー。最初からですか？

H そう。

OS 最初に参加したのは、この平和通りというブースに卸すからっていうので参加したんですか？

H 違う。あの一、うち（スーパー）で毎年オキナワン・フェスティバルっていうのをしてたのを、県人会の人が、商品流してくれないかっていうことで始まったの。

OS ということはそっちがオキナワン・フェスティバルをやってたんですか？

H そう。

OS それで県人会と一緒にやってくれないかってことで、こういうのが始まったんですか？

H そう。

OS ええー。そうだったんだ知らなかったです。

H だから最初は県人会の方がうちに遠慮してやってたんだけど、だんだんうちの方が遠慮して……。 (笑) もう今はそちらに合わせますって感じでやってるの。

OS そうだったんですね。ところで、いつも、何を楽しみにオキナワン・フェスティバルに来ていますか？

H そうね、郷土の人たちが、沖縄の人たちが一堂に集まれる場所っていうのは多分ここしかないと思う。ここに住んでる人だけじゃなく、ハワイの他の島からこれを楽しみにして来る人も多い。だからここ周辺のホテルっていうのは、ほとんど県人会の宿泊客が埋め尽くしてる。で、必ずしもこのハワイ州の人だけじゃなくして、前だったらロスから踊りに来るとか、そんなこともあったし、他の国の人も来られて、参加するのね。だから沖縄の人がこれだけ盛り上がってるっていうのを側面から応援できるっていうのはすごい素晴らしいことと思うよ。うん。僕にとっちゃ、どんなコミュニティサービスよりも、これの方が一番楽しいし、それと彼ら、1年に1回しかほとんど会えない。だから、ボランティアもみんなよりいっそう頑張ってる。1年に1度会って、やあ、久しぶりー、とって。そういうあれが、楽しいんじゃないのかな。

OS 話は少し変わりますが、オキナワン・スピリットって、オヒデオさんはどういうものだと思いますか？

H あの一、なんだろう。人を愛するところっていうのかな。あの一……なんて言うのかな。自分のためだけじゃなくして、人のために何かできる。そういうところがあるんじゃないかな、と思う。多分ハワイにもそれはあると思うけど。

OS ちょっとなんか似てますよね。アロハスピリットと、オキナワン・スピリットって。なんか、ハワイもアメリカ本土とも違うじゃないですか。同じアメリカにはなっているけど。なんか、助け合いとか人を愛するとか、そういうところがアメリカ（本土）とちょっと違う感じがする。むしろ沖縄と（ハワイは）似てるかなって。

H そうだね。違った形で多分そうなると思うよ。今ほら、ハワイだったらあの一、アメリカの中で、唯一オリエンタルな人口が白人系を上回っているじゃない？ 51%が、ジャパニーズ、コリアン、チャイニーズ、フィリピーノ……といった白人以外の人種。だからほら、全然違ったあ

れになるんだよね。

OS ジャあ、ウチナンチュの文化で、一番重要だと思う文化って何ですか？

H うーん、僕が思うに、先輩達とか親、おじいちゃんおばあちゃんたちがやってきたことに、感謝している子供たちが多い。というのは一世たちは日本人にさせようとして子供たちを一生懸命育ててきて、結局自分のためじゃなく子供のためにやってきて。それを着実に子供たちが受け継いでいる。自分の子供だけじゃなくして、他の子供も、例えばスカラシップ（奨学金）を与えて、出来る人は育ててあげて行くとか。そういうものが、今の沖縄県人会を作ったんじゃないかな。それとほら、沖縄県人会の人たちが、そういうノウハウをどんどん教えてあげている。これはすごい素晴らしいことだと思う。多分他の国とかで、そういうことが起こっているっていうのは少ないんじゃないかな。

OS そうですね。ほとんどが、その伝承がうまくいかないでどんどん衰えて行っちゃうのに、オキナワンはどんどん元気になっていくから。（笑）それがすごいですよね。

H そう。あと政治的にもオキナワンが与える影響って大きくなって思うよ。もう何年か前だけど、このフェスティバルにクリントン大統領が来られたことがあるんですよ。その時の知事がハワイ系のジョン・ワイヘエで、彼が連れてきたんだけど、アメリカの大統領が一県人会のフェスティバルに参加するっていうのはあり得ないことでしょ。

OS あり得ないですよ。

H でもそういうことがあるっていうことは、やっぱりその県人会がここまで築いてきたものっていうのがね。で、違った意味で話を聞いたのが、そのジョン・ワイヘエっていう知事の奥さんが確か沖縄人だと思うよ。

OS やっぱり親しみやすいとかそういうのがあるんですかね。

H 別に前に出て色々するわけじゃないんだけど、そういう奥さんの力っていうのがあるんだろうね。

OS 次に、ヒデオさんの考えでは、オキナワンは日本に属してる民族だと思いますか、それとも、日本とは違った民族だと思いますか？

H あの一。全く同じだと思うんだけど、僕自体三重で生まれて来たから。でも、オキナワンの持つ文化とか習慣とか、そういうのって素晴らしいものがあるじゃない。それは、国を抜きにしても、守っていく、育てていかなくちゃいけないものだと思うよ。

OS すごい。

H いやだってほら、文化を持つのは大事にしないと。大変でしょ。

OS 日本の一部だけど、全体で守っていかなくちゃいけない、というような意味ですか？

H そう。そして日本の代表になりゃいいじゃない。

OS そうですね。日本と言えば沖縄みたいな。

H そう。

OS いつかなるかもしれないですね。ところで、ハワイの沖縄系の人たちが抱えている、または解決すべき問題とかあると思いますか？

H どうなのかなあ。多分ねーあの一、僕は県人会に関わったことはあまり無いんだけど、他から聞く話だったら、ハワイ州で一番大きな催しができるのは沖縄県人会。だから、ハワイの代表

として、他の、例えばフィリピーのとかチャイニーズとか……いろんなものがあるじゃない。そういう人たちを指導して行って欲しいというのを聞いたことがある。だから色々な形でサポートしてあげてと思う。だから、県人会の人たちがね、僕なんかの見えないところで、結構、あれ（援助）してあげてと思うよ。

OS オキナワンだけが盛り上がるんじゃないくて、ハワイの中で、色々な民族がこうやって盛り上がっていきけたらいいですね。他の民族の人も、こういうお祭りとかやってたりするんですか？

H えーと、あると思うよ。フィリピーノも昔からあるし、先々月ぐらいに確かコリアンもここでやってたと思う。規模的にはここよりかなり小さいけども、やってるから。日本人でやってる一番大きいものは沖縄のこれ（オキナワン・フェスティバル）。ちなみに、人口的に一番大きい県人会は広島県人会で、二番目が山口、三番目が熊本、沖縄は四番目でしょ。でも、これだけのことができる。多分他は、県としてはままとまってないだろうね。他の県は陸続きっていうこともあるだろうけども、沖縄って孤立してる島国じゃない。

OS 昔移民で来たときに、日本人としてきたけど、ハワイの白人には日本人だって差別されるし、日本人のコミュニティでは沖縄人だって差別されるし、それで辛い思いをしたから、よりそのコミュニティが強くなったのかなって思うんですけどどうでしょう。

H うん。それもあるかもしれない。そんな話も聞いたことある。でもそれを許してあげて、温かく見守ってあげるパワーっていったら、たいしたもんだよ。いじめられてもいじめ返すことなくして、逆に受け入れて、指導してやってあげてるからね。だから今はその考え（差別意識）はあまりないんじゃないかな。前はあったかもしれないけど。

OS あまり自信が持てないような状態から、今は（オキナワンとして）プライドを持つ、というふうに変わって来たということでしょうか。

H やっぱ、これだけのものを見せつけられたらね。（笑）

OS そうですよ。これを見たら自分がオキナワンで良かったって思いますよね。

感想・観察（大浪・鈴木）

「平和通り」のブースでインタビューに応じてくれる人を探していたら、ブースで働いていた人がヒデオさんを紹介してくれた。ヒデオさんはドン・キホーテのブースでヘッドバイヤーをしている。仕事であつたにもかかわらず、たくさん話を聞かせてくれた。ひとつ質問するとたくさん答えてくれるので、とてもありがたかった。

驚いたのは、昔ダイエー（ドン・キホーテの前身）がフェスティバルをやっていたところに県人会が入ってきたという話。このような話は誰からも聞いたことなかったのが、当然のように最初に県人会が始めたところに後から参加したのだと思っていたが、ヒデオさんの話では違うらしい。県人会の方に確認してみるべきことであつた。

何を楽しみにしているか、オキナワン・スピリットとは何かという質問では、やはり他の方と似た答えが返ってきた。どんなコミュニティサービスよりもフェスティバルの手伝いが楽しいと言っていて、好きだから、楽しいからこれだけ労力のいる仕事ができるのだと思った。オキナワン・スピリットについては、助け合いや人を愛する心だと言っていた。人のために何かできる、というのが他の民族よりも強く、さらにオリエンタルな人口が白人系を上回るハワイだからこそ、ここまで

フェスティバルが大きくなった理由のひとつである。オキナワンであると言いたい人が増えているということからも分かるように、差別されていた時代を乗り越えたオキナワンは民族に大きな誇りを持っている。そして今では沖縄コミュニティの外へも影響が広がっているのではないかと思った。

ヒデオさんの話を聞いて、もっとたくさん日本にいる日本人にこのフェスティバルのことを知ってもらいたいと思った。私自身、ハワイ＝観光地で綺麗な海のイメージしかなかったが、オキナワン・フェスティバルや沖縄県人会の存在、2000人を超えるボランティアスタッフの数等を知り、オキナワンのコミュニティやパワーに感動したからである。これだけ大きなオキナワンのイベントがあることを多くの方は知らないだろう。沖縄の文化がハワイに伝わり続けていること、オキナワンにはこれだけ大きなフェスティバルを開催できるパワーや繋がりがあることを知ってもらいたいと思った。

<白水 補記> 大手の日系スーパーが1982年発足のオキナワン・フェスティバルより先にオキナワン・フェスティバルを催していた、という話は傾聴に値する。筆者も聞いたことがなかった。ただ、想像するに、類似の名を冠したイベントを催していたのではないか。日本国内でも大手スーパーやデパートが沖縄・九州展とか北海道まつり等と称して食料品や物産品などを展示販売することは多い。ヒデオさんが勤める大手スーパーも長年にわたり沖縄から大量かつ多種の沖縄物産品を展示販売する大きなイベントを催してきたと考えると、そのノウハウがオキナワン・フェスティバルの会場内の「平和通り」という巨大な売り場に活かされているといえそうである。ヒデオさん自身は三重県で育ったこともあり自身日本人とっていたようだが（「日系人アイデンティティ型」）、むしろハワイに来て、オキナワン意識が芽生えたというところだろう。

<No.12> ヴィヴィアン

生年 1950年 女性

世代 三世（本人の先祖は広島県、夫の先祖が沖縄県小禄）

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小禄字人会：夫の所属クラブ）

職業 スーパーマーケット店員

住所 ホノルル

インタビュアー 鈴木美咲（当時駒澤大学3年生）

2012年9月1日 トマス・ジェファーソン小学校キッチン（アンダーギーの生地作り）

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

美咲 (M) このフェスティバルにはいつごろから参加していますか？

ヴィヴィアン (V) そうね、もう10年くらいになるから2002年頃からはしら。

M このフェスティバルでは何が楽しみですか？

V フード（オキナワン・フード）、舞台をみること、そして孫やその家族との再会。この機会に会うことにしてるのよ。孫といえば、カルチャーテントで記念撮影をしてもらうのが楽しみね。ほらカルチャーテントの中で琉球の衣装を着せてくれて、それをプロのカメラマンが記念撮影をし

てくれるでしょ。そこで娘や孫の写真を毎年撮ってもらうのよ。

M 毎年アンダーギー作りのボランティアをしておられるようですが、アンダーギー作りはどうですか？

V じつはアンダーギー作りはたいへんで、頭痛の種なんだけど、ま、楽しんでるわね。

M ウチナンチュ・スピリットとはなんだと思いますか？

V 一緒に何かをやること。友人や家族のために何かすることだと思うわ。

M ウチナンチュ文化で最もだいじだと思うものは何ですか？

V 踊りが一番大切ね。私は老人会で沖縄の踊りとフラのクラブに入っているのよ。

M オキナワンはジャパニーズだと思いますか、それとも独自のエスニック・グループだと思いますか？

V 自分は、ジャパニーズだと思う。でも、ハワイでは、オキナワンは自分たち独自のエスニック・グループよね。

M ハワイのオキナワン・コミュニティで問題だと思うことはありますか？

V チャレンジ精神に欠けているわね。自分たちはもっといろいろなことに興味をもってチャレンジしていくべきよね。

観察・感想（鈴木美咲）

ちょうどお昼ご飯を食べ終わったところでアンダーギーの生地作り作業も落ち着いていたためインタビューすることができた。話しかけると笑顔であいさつをしてくれた。インタビューしたいことを伝えると快く応じてくれた。

ヴィヴィアンさんは日系三世。先祖の出身は沖縄ではなく広島で、旦那さんの出身地のクラブに入っている。旦那さんはウチナンチュの三世で以前は公務員だったが、今は退職して孫のベビーシッターをしているらしい。ヴィヴィアンさんには娘と息子がいて、息子さんは未婚。上の娘さんは本土に住んでいたが、5年前にハワイに移住してきた。娘さんには4歳の息子さんと4ヶ月の娘さんがいて、この孫の写真をカルチャーテントで撮るのが楽しみのようだ。

ヴィヴィアンさんは質問にゆっくり答えてくれたため、とてもインタビューしやすかった。私分からないようだと自分から言葉を変えて言い直してくれるなど、とても親切な方であった。初めて参加した時のきっかけ、アンダーギー作りがなぜ頭痛の種なのか、チャレンジとは例えばどのようなことかなど、もっとたくさん聞きたいことはあったのだが伝えることができなかった。聞けば答えてくれただろうに、私の考え・英語力が足りなかったせいで中途半端なインタビューになってしまったことが悔しい。

<白水 補記> ヴィヴィアンは祖父母が広島県出身で、沖縄の系統ではない。夫がオキナワンだからいろいろな活動をいっしょにやっているにすぎない。それににもかかわらず、下記のアルマさんの話にも出てくるように、彼女は沖縄系のボランティア活動にたいへん熱心である。このようなナイチをオキナワン・コミュニティでは「Uchinanchu-at-heart」と呼ぶ。一種の誉め言葉である。日本でも親日的外国人の行動を称賛して「日本人より日本的」という言い方をするが、それに近いニュアンスがある。ヴィヴィアンは自他ともに認めるUchinanchu-at-heartである。ハワイのオキ

ナワン・コミュニティには、じつはこうしたナイチは多く、元HUOA会長エドの妻ポビーなどは沖縄系の女性ボランティア団体（ファイ・オー・ラウリマ）の会長をはじめ、さまざまな場面で奮迅の活躍をしてきた。筆者の見るところ、かれらがいなければ回らない部門は少なくないはずである。妻がオキナワンで、夫がナイチというカップルも、同様に夫が「Uchinanchu-at-heart」と「称賛」される例が少なくない。アイデンティティに関しては、彼女自身はナイチ系であるためか自分はジャパニーズだと規定するが、オキナワンは独自のエスニック集団であると明言している点に留意したい。

<No.13> アルマ

生年 1951年 女性

世代 三世

HUOAメンバークラブ Oroku Azajin Kai（小禄字人会）

職業 元公務員

住所 ホノルル

インタビュアー 大浪優紀（当時駒澤大学3年生）

2012年9月1日 トマス・ジェファーンソン小学校キッチン（アンダーギーの生地作り）

使用言語 英語

[インタビュー核心部分抜粋]

大浪（O） オキナワン・フェスティバルに何回参加してきましたか。

アルマ（A） 多分15回くらい来ているから1997年ごろからだと思う。

O 何を楽しみにこのお祭りに来ていますか？

A お手伝いすること（ボランティア）。いろんな世代のいろんな人に会えること。一緒に働くこと。日本から来た人に会えること。子どもたちに会えることなどね。

O いろんな人に会えることが楽しいんですね？

A そうね、それが一番ね。

O ウチナーンチュ・スピリットというのはなんだと思いますか？

A そうね、一緒に働くこと。共通の目標を持つことじゃないかしら。

O ウチナーンチュの文化の中で最も重要なものはなんだと思いますか？

A 子どもたちの面倒をよくみること。大人たちが子どもの成長を楽しみにすること。子どもを大事にするよね。

O オキナワンは、民族的にジャパニーズか、それとも彼ら自身の民族集団に属していると思いますか？

A ジャパニーズもオキナワンも同じだと思う。

O ハワイのオキナワンのコミュニティが抱えている問題は何だと思いますか？

A 子どもたちがとても忙しい。学校で色々なアクティビティをしている。もっと沖縄の文化に触れてほしい。そのチャンスがない。

O 何か沖縄の文化を習っていますか？

A いまのところ、時間がなくて習っていない。祖父が三味線をやっていて、自分もやりたいけど、今は母親の病気の介護で時間が無いのでできないのよ。

観察、感想（大浪優紀）

アルマさんにとって、オキナワン・フェスティバルは、「再会する」場所でもあり、「新しい出会い」が生まれる場所でもあるのだと感じた。アルマさんはとても柔らかい表情に、優しい声で、私たち日本人の学生ボランティアのことをとても気にかけてくれる方だった。インタビューをお願いした時も、「私は日本語が話せないし（日本語でのインタビューだと思っていたらしい）、何も話せることはないんじゃないか。」ととても心配しながらも、快諾してくださり、ボランティア二日目も会うと必ず声をかけてくれた。お別れの時、お礼を言うのは私たちの方なのに、何度も「手伝ってくれてありがとう」と言い、しまいには他のメンバーにもお別れの挨拶はできたかと心配し、メンバーを探してくれるようなとても真面目な方だった。そんな私たちをととても温かく迎えてくれた彼女の、「色々な人に会えることが嬉しい」という言葉にはとても納得できた。

ウチナーンチュ・スピリットに関する質問では、「一緒に働くこと。共通の目標を持つこと。」をあげてくれた。長年オキナワン・フェスティバルに参加しているからこそ、このように感じたのではないかと感じた。しかしこの部分はあまり聞き取れていないことと、アルマさんの言っていることを正確に理解できていないのではないかと心配だ。

オキナワンの文化で重要なものでは、文化というよりも、オキナワンとして重要なことをあげてくれた。子ども好きの彼女らしく、子どもについて中心に答えてくれた。今の子どもたちは忙しすぎると残念そうに答えていた。この質問項目は、個人の思考や趣味、背景などで全く異なる答えが返ってきて面白いと感じた。

オキナワンは、民族的に日本人か、それとも彼ら自身の民族集団に属しているかという質問では、隣に座っていたヴィヴィアンさんを例に、「同じだと思う」と答えてくれた。ヴィヴィアンさんはオキナワンの血は入ってないが（夫がオキナワン）、周りの人が「誰よりもオキナワンだ」と言い、ヴィヴィアンさん自身も「私は心はオキナワンよ」と言っている人物である。きっと大切なのは、筋肉や家系や、民族、生まれた場所なのではなくて、自分が何に愛着を持つか、自分が何を信じるかではないかと思う。しかし、「異なる」とされているマイノリティを受け入れるマジョリティに、問題が生まれやすいと思う。例えば、田舎の小さな村などに引っ越すと、自分は早く仲間に入りたいのに、あまり受け入れられなかったり、壁を作られてしまったりする。ヴィヴィアンさんの場合、夫がオキナワンだということもあったのかもしれないが、多くのオキナワンがウチナーンチュ・スピリットとして、friendlyやhelping each otherとあげているように、マイノリティを受け入れやすいのだろうと感じた。また、様々な文化が共存しているハワイだからこそ、より受け入れやすいのではないかと思う。

ハワイのオキナワン・コミュニティが抱える問題として、また彼女らしく、子どもについての問題をあげてくれた。子どもたちが忙しすぎて、もっと沖縄の文化に触れてほしいとのことだった。確かに現代の子どもは忙しい。それはハワイも同じなのだろう。オキナワン・フェスティバルを継承させるためには、子どもたちを沖縄の文化に触れさせることが重要である。あまり沖縄の文化に触れる機会がないからこそ、今後オキナワン・フェスティバルは子どもが沖縄文化に触れる機会を

与えるイベントとしても重要な役割を担いそうである。

注

(1) エスニック・リーダーとは変容エージェントの一種である。変容エージェントのなかで特定のエスニシティ（民族性）にかかわる意識の変容を促すリーダーを特にエスニック・リーダーと呼ぶ。**文化変容**（**cultural transformation**）とは、ある特定の集団（たとえばハワイでいえば日系人というエスニック・グループ=民族集団）や社会（ハワイでいえば各種集団を内包するハワイという地域社会）の人びとの価値観や行動様式が変化することである。したがって、**変容エージェント**とはある特定の集団や社会の人びとの意識や行動様式の変容を促す主体actorである。なお、エージェントとは他者に影響を及ぼすべく自覚的に行動する人間である。エージェントのなかで一定の追随者を持つ者をリーダーと呼ぶ。なお、ジャーナリストのなかにもエスニック・メディア（ある特定のエスニック・グループのための新聞・雑誌等のマスメディア）などで働く人のなかにも、民族文化主義的な発想のジャーナリストがいる。かれらをエスニック・ジャーナリストと呼ぶ（白水、2018, 2-3）。

(2) 半構造化インタビューとは、質問文は用意するが、回答部分がほとんど自由回答になっている半構造的質問紙を用いるインタビューのこと。

(3) 面接調査員としての訓練は、インタビューに慣れるために校外（長野県K市）での一般市民へのインタビューや神奈川県S市での合宿でロールプレイング等を行った。

(4) （インタビュー調査における）調査相手の語りを記述する場合は、調査者の質問とそれへの相手の回答（語り）を「そのまま」書き写す「対話引用方式」と、調査者が相手の語りを大幅に編集しなおす「編集構成方式」がある。一般には対話引用方式を活かしつつ主題と関係ある部分とそうでない部分を選び分け、ある程度構成しなおす「対話・編集方式」が用いられることが多い（白水、2015, 57）。

引用文献

白水繁彦（2015）「女性が自立をするということ：ライフストーリーから読み解く高学歴女性の適応のストラテジー」『Journal of Global Media Studies』No.17/18合併号, 2015, pp.55-67.

白水繁彦（2018）『海外ウチナンチュ活動家の誕生：民族文化主義の実践』御茶の水書房.

〈訂正とお詫び〉

本研究と姉妹篇を成す拙著『海外ウチナンチュ活動家の誕生：民族文化主義の実践』（御茶の水書房、2018年3月刊）の222頁、当銘貞夫氏の紹介文中に「日本ペンクラブ会員」とあるのは誤りで、正しくは「**日本エッセイスト・クラブ会員**」です。ここに訂正し、当銘氏および読者のみなさまに深くお詫び申し上げます。